



佐久市立近代美術館に収蔵されている柳碧蘚さんの代表作の一つである「龍虎」

# 今月のFujimist

やなぎ へきせん  
柳 碧蘚 さん(書家)  
(齊藤 登)

固 秘書広報課 ☎049-256-9535



「太古の暮らしを抽象化した甲骨文字から発展した漢字が持つ魔力にとりつかれてしまったことが、私の人生を書家として方向づけたのでしょうか。そう語るの、令和4年7月に第73回毎日書道展で文部科学大臣賞を受賞した柳碧蘚さん。日展入選など数々の賞に輝き、学習院大学講師などを歴任、毎日書道会理事や全日本書道連盟理事などの要職を務める日本を代表する書家の一人だ。

その作品は、千葉県成田山書道美術館や長野県佐久市立近代美術館、さらには海を越えてフランス・パリのギメ東洋美術館にも収蔵されている。しかし、過去の作品にとらわれず、絶えず自分の表現を追求してきた。「たとえ会心の一笔だったとしても、すべて白紙の状態から文字を見つめ、湧き出てくるものを正直に書き表すことが信条です」。

数えきれないほどの作品を描いてきた柳さん。良い作品が出来上がる瞬間について聞いてみた。「これまでの作品の中で納得のいくものがあつたのかは私にも分かりません。ただ、眠りから覚めたときの朝日の輝きや爽やかな鳥のさ

えずりを聞き、よい墨が磨れると、不思議と『今日は書ける』と感じられる日があります。そんな日は、筆を執る前から出来上がっているような感覚を覚えます」。

3年前、大病を患った。現代書をけん引する6人の書家による展覧会「書・六人展」(上野の森美術館。令和3年9月)に向けて準備をしていたころのこと。入退院を繰り返す。「もう筆を持ってないか」と絶望しかけたが、出展する書家の仲間たちからの鼓舞の声を聞き、折れかけた心を取り戻すことができた。「私にとって書は命。それがなくなっていたらと思うと想像を絶する思いです。仲間たちは命の恩人も同然です。今年75歳を迎え、そのほとんどを書と向き合って生きてきましたが、残された時間は長くはない。一筆一筆を大切に、書とともに生きてきた“自分”をいかに表現するかを追求していきたいと思っています」そう今後を語る柳さん。書の魔力はまだまだ柳さんを惹きつけて離さない。魂の一笔を振るうことができるその日まで。

■市公式  
ホームページ



■ SNS



LINE  
Facebook  
Twitter  
Instagram  
YouTube

【カタログポケット】広報『富士見』を多言語で

【マチイロ】広報『富士見』をスマートフォンで

【テレ玉データ放送】テレ玉(地デジ3ch)視聴中にdボタンで市の情報を視聴

## 人口と世帯数(12月1日現在)

人 □…112,944人(前月比 +41人)  
(男 55,401人 女 57,543人)  
世帯数…54,427世帯(前月比 +37世帯)



SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS



富士見市は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

広報『富士見』は、市内の公共施設や駅などにも置いてあります。声の広報『富士見』(音声DASVYプレイヤー)版は市内図書館で貸し出しています(市ホームページで聴くこともできます)。

